

風景を懐かしみながら歩いていると、見覚えのある小さな広場のような場所に出た。あ！ここは以前馬で訪れた時に休憩を取った場所だあ！！

慣れない乗馬でおしりをさすりながら、みんなで草の上に座りおやつを食べたり水を飲んだりした事を思い出す。私たちが休憩していた広場から道を挟んだ向かい側にはマニ塚が立てられ、チベットの経文が書き込まれた色とりどりの布が万国旗のように連なるタルチョがぐるぐると巻きつけてあった。道の下には素晴らしく美しい湿原が広がり、湿原から流れ出る小川に小さな石積みの橋がかけられている。橋の回りにも向こう岸にも沢山のタルチョが巻きつけられているのが、そこが何か特別な場所であるのを感じさせていた。

ああ、橋の向こうに何があるのか見に行ってみたいなあ・・・あの時の私は、団体旅行で好き勝手な行動が許されない我が身を口惜しく思いながら向こう岸を眺めていた。今回は誰にも気兼ねなく好きなだけ道草を食べる一人旅だ。今度こそ帰るまでにこの奥に何があるのか見届けに行かなくっちゃ！！

喜びに胸を膨らませ思い出に浸っていると、一行は道をそれて橋を渡った。

「え？こっち！？・・・此処に何があるの？」

私の問いに誰かが答えた。

「チョンクス沖古寺だよ」

え～！？チョンクスって、ここの事だったのかあ～！

そうなのである。前は何か考えず人に付いて行っただけの私は、亜丁の地理について全く把握していなかった。みんなと会話しながらも、「チョンクス」というカタカナでしか思い浮かばない地名がお寺を表していたとは、ここに来るまで気付かなかったのだ。

そうと知っていたら、何か宗教的な意味のある土地に違いないこの場所とのつながりに気付くことも出来たかもしれないのに。

「なんだよお～。たった此処までで30元かあ・・・」

亜丁の入り口を出発してからまだいくらも歩いていない。私がこの日目指したかった洛絨牛場までは、まだかなりの距離が残っている筈だが、ポーター少年との契約は此処までの約束だ。

これからどうしよう・・・自分の大荷物を考えて、私は戸惑ってしまった。

小さな橋を渡って少し坂道を登るとお寺の屋根のようなものが見えていたが、私たちが入っていったのは粗末な小屋がいく棟か建てられている宿泊所の中庭だった。

そういえば亜丁では洛絨牛場の他にお寺にも泊まれる

場所があると、あの時、烏里氏に聞いた覚えがある。以前はお寺の本堂に泊めてもらっていたらしいが、観光客が増加したため此処にも宿泊施設を作ったのだろう。

中庭に置いてあるテーブルの上に荷物を下ろし、少年に30元渡した。先程の一件以来無口になってしまった少年は、お金を受け取ると黙って立ち去っていった。

気立ての良さそうな可愛い子だったのにな。あんな事さえなければ、もっと仲良くなっていたのかもしれないに・・・。

宿の前では中国人の学生と見られる若者グループが出かけようとしている所だった。

すかさずアーロンが話しかける。

「你好！君たち今日はここに泊まるのかい？宿代はいくら？」

彼らは男女7人で広東省からやって来たという学生のグループで、部屋は一人40元との話だ。

「うわ、これで40元？高え～・・・」

アーロンが顔を曇らせる。

確かに掘っ立て小屋としか言いようのない目の前の小屋と比べれば、昨夜泊まった稲城の温泉は此処よりずっと上等な宿であったが、宿代は20元だ。これも観光地価格ということなのだろう。

新たな客かと表に出てきた、宿の女将が強欲そうな顔つきで言った。

「亜丁にはここしか宿は無いわよ。亜丁に滞在したきゃ、ウチに泊まるのね」

「洛絨牛場は！？あそこにも宿泊施設があるでしょう？」と私。

おかみは首を振りながら答える。

「牛場の宿はシーズンが終って一週間前に閉めたわよ。営業してるのはウチだけよ」

「本当！？それは確かなの！？」思い出のある洛絨牛場に泊まる事にこだわっていた私は、諦め切れずに女将に何度も問い直した。

「ウチだけよ。ウチに泊まりなさい」

その時、後ろにいたシャオチンがそっと私の服の袖を引き、小さい声で囁いた。

「あんまり信じない方がいいわ。自分の宿に泊ませようと嘘をついているのかも知れない」

確かにこの女将だったら、そんな事もありそうな雰囲気なのだ。

う～ん・・・私は迷ってしまった。

牛場には泊まりたいが、大荷物をどうやってあそこまで運ぶのだ。それに洛絨牛場まで行って本当に泊まる場所

が無かったら・・・

そんな時だった。誰かの叫び声で目を上げると、それまで雲に包まれていた小屋のすぐ後ろの空に、天を突き上げるような雪山が雲の切れ目から頭を覗かせていた。亜丁三大神山の最高峰、仙乃日(シェンナイリー)だ。

「おお～っ！！神がお姿を現したぞ！！ みんな祈れ～っ！！」

アーロンが大げさな叫び声を上げ、それにつられたウィーンと共にその場で猛烈に五体投地を始めた。祈りというよりは殆ど体操だ。私が声をあげて笑うと、

「恥ずかしいからやめてよ、もう」シャオチンが口元を歪めて苦笑した。

残念ながら二人の激しい祈りは天まで届かなかったのか、神はすぐに再び厚い雲の中に姿を隠してしまわれたが、もし雲ひとつない時にこの場所にいたら、どれ程素晴らしい眺めなのだろう。

お祈りがすんで、シャオチンと話していたアーロンが言った。

「俺達は亜丁に泊まるのは辞めとくよ。ここは物価が高すぎるぜ。今日一日、亜丁で過ごして夕方稲城に戻ることにするよ」

私は心変わりしたアーロンの気持ちが少し解るような気がした。素朴な自然や人々を愛する彼は、こんな奥地にありながら相当観光ずれしていると感じられる土地の雰囲気、早くも違和感を覚えているのだろう。「旅行者なんだから金を出せよ」とばかりに足元を見たような態度で迫ってくる村人達の思惑にはまるのは嫌なのだ。

「でも、亜丁にはすごく綺麗な湖があるんだよ！ 泊まらなきゃ見に行く事が出来ないけど、本当にすごく綺麗なんだよ～！！」と、私。

「いや、湖なら俺達はあちこちで沢山見てるから、もういいよ」

・・・でも、でも、あの湖は、そんな他の場所の湖とは全然違うのに～！！自然を深く愛するアーロンだからこそ、私はぜひともあの湖を見せたかったのだ。

気の合う旅仲間としてアーロンとシャオチンがかなり気に入っていた私は、彼らが同行しないと決まって少なからずガッカリしたが、出会いと別れは旅の日常だ。所詮は行きずりの旅人同士なのだ。限られた旅の時間を何処でどう過ごすかは各人の自由で、私がここで彼らを無理に引き止める事は出来ないのだった。

「元子、君はどうするつもりだい？」

うーん・・・どうしよう

・・・私が亜丁に滞在する時間はまだ十分にある。しんどい思いをして大荷物を運び、路頭に迷うリスクをおかし

てまで牛場に行かなくても、今日のところはここに荷を降ろし、改めて軽装で様子を見に行けばいいんじゃないの？ 宿泊の可否を確認してから牛場に宿を移したって遅くはないだろう。

今日この宿に泊まっている学生グループも感じのよい若者達だし、色々迷うのが面倒になってきた私はこのまま沖古寺に泊まることに少しばかり心が傾きつつあった。

「ところで、あなた達はこれから何処に行くの？」

決断を先延ばしにして、その場にいた学生達に尋ねると、「珍珠海チンジュハイを見に行くんだ」と宿の裏山の方向を指差した。

中国では池や湖を総称して海子ハイと呼ぶ。日本語で「～池」や「～湖」などと呼ぶところは「～海」と表現するのだ。

「え！？ こっちにも海子があるの～！？」

私は即座に宝石の湖を思い浮かべた。あんな綺麗な湖がこっちにもあるの！？これでほぼ私の心は決まってしまった。

「私も珍珠海を見に行きたい！！ ねえ、一緒に行かない？」

声をかけると、アーロンは首を振りながら答えた。

「元子は海子が好きだなぁ。俺達は時間が無いから遠慮するよ」

「そうかあ～・・・じゃあ、私は彼らと海子を見に行くことにしようかな」

振り返ると宿の女将に言った。

「ねえ、海子を見に行く間ここに荷物を置かせてくれる？」

おかみは黙ったまま胸の前でパッと片手を開いて見せた。

「は？」

「5元」

「はあ～！？ ほんのしばらく荷物を置かせてもらうだけなのに、お金取るの！？」

無表情のまま女将が言った。

「5元よ」

それまで懸命に抑えていた何かが、私の中でプツンと切れた。

「もういいよ！！荷物は預けないわ！ 真珠海も行かない！自分で背負って牛場まで行くよ！！」

私は女将に背を向け勢いに任せてテーブルの上に置いてあった大きなザックを背中に背負うと、それまで背負っていたハイキング用ザックを胸側に抱くように肩にかけた。

「さあ、行こ！！」

まるで荷物に埋もれたような私の姿をみんなは戸惑ったような顔で眺めていたが、さほど重さは感じなかった。私は完全に怒っていたのだ。

「レッツ・ゴー！！！」怒りに任せて大声を出し、先頭を切って歩き出すと空に向かってこぶしを振り上げた。

(次号に続く)